

[発行日]=1999年9月14日

[本文]

旅に出て、暗くなっても宿がとれない時ほど心細いものはない。

デンマークからのフェリーの中で、ヘルシンボリの、いくつかのユースホテル (YH) に電話をかけて、予約が取れないまま、スウェーデンに入ってしまった。夜の九時だというのに、外は本が読めるほど明るい。二時間も粘ったが、安宿はどこも駄目だった。

街は人でいっぱいだった。明日から祭りが始まるという。大道芸人の若者たちが、そのあたりで転がって寝るしかないと誘ってくれた。服をあるだけ着込んで、シーツを巻いて寝るかとも思ったが、カミさんの顔がチラリとよぎって、隣の街まで行こうと決めた。

汽車の窓から見る夕焼けがきれいだった。しかも、不思議なことに、夕日がなかなか沈まないのである。意外と汽車の便が少ない。隣街に着いたのは十二時近い時間だった。ここでも、バックパッカーの若者たちが野宿する所を探している。ポーランドから来たという二人連れである。服装も野暮 (やぼ) ったいし、ホテルに泊まる格好ではない。ご同輩である。

スウェーデンの初日は、クールな幕あけになりそうだなと覚悟した。昼はTシャツ一枚でも、朝晩はぐっと冷える。ふうーっと溜息 (ためいき) をついたら、目の前に、すごく立派なホテルがある。古くて、どっしりした美術館のような建物である。YHが一泊百クローネ (約千五百円)。ここなら安い部屋でも千クローネはするだろう。

疲れていた。ドアを押したら開いたので、この格好では追い払われても仕方がないと思いながら入って行った。背中にザックを背負い、肩にはカバンをたすき掛けにしている。ザックやカバンには、傘や自炊用の道具、サンダルを入れたビニール袋、巻いたシーツ、レインコートを丸めたもの、などが賑 (にぎ) やかにぶらさがっている。極めつきは、孫に貰 (もら) った交通安全のお札と、鈴である。歩くたびにリンリンと涼やかな音がする。大道芸の若者たちから誘われた訳が解 (わか) るような気がした。

いきなり「一番安い部屋は、いくらですか？」と訊 (たず) ねた。さすがに、二十代の時のように「布団部屋でも、けっこうですから」とは言わなかったが……。

さて、少々高くはついたが、スウェーデンでの初夜は、ホルムスタッドとい

う街の、その名に恥じないグランドホテルでの、深夜のシャワーに落ち着いた。

熱い風呂（ふろ）に、どっぷりと浸（つ）かりたかった。テレビを点（つ）けたらスウェーデン語である。

大阪からマレーシア経由でオランダに飛び、デンハーグで憧（あこが）れのフェルメールの絵に会い、長崎ハウステンボスのモデルとも言われるスハルトゲンボッシュの街で、去年、武雄に滞在した陶芸家のネッティさん夫婦に温かいもてなしを受けた。そこから汽車で、ドイツのブレーメンやデンマークをトコトコと見て廻（まわ）り、ほぼ一週間で過ぎていた。